

## 革命イランにおける政教関係の再考 ——ハウザの教育機能と政治・社会的関与——

黒田 賢治\*

### 0. 課題の所在

1979年にイラン・イスラーム革命が起こった結果、イランには「イスラーム共和制」という史上初の国家体制が成立した。この体制は「法学者の統治 (Velāyat-e Faqīh)」論に立脚するため、法学者の役割が非常に大きくなった。ホメイニー師の死後、最高指導者の権限が憲法によって強化された一方で、イスラーム法学者によって構成される専門家会議 (Shūrā-ye Khobregān) が最高指導者を選出することが明確となった。また松永泰行の指摘するように、ハータミー政権以降には多数の政党が認可されたこと、鈴木均の指摘するように、革命ガードなど現体制内で構造化された組織集団が政治組織化したこと、佐藤秀信の指摘するように、テクノクラートを中心とした非法学者の現体制支持集団の台頭のように、政治勢力が多極化している [松永 2002; 佐藤 2004; 鈴木 2006]。政治勢力の多極化の現象の一方、依然として法学者が継続的に政治的にも重要な役割を担っている。そのような彼らの政治的な機能については研究がなされてきたが、彼らと彼らを支える関係性の実態については研究が深化しているとは言い難い。本稿ではそれらの実態の1つとして、法学者の育成機関であるハウザ (Ḥawza) に着目したい。

先行研究におけるハウザという用語を瞥見すると、2つの用法が見出せる。第1にシーア派教育の場として、個別のマドラサと代替可能な言葉として用いている場合<sup>1)</sup>。第2に、個々のマドラサの連合体として用いている場合である<sup>2)</sup>。両者の用法に関しては、フィッシャー (Michael M. Fischer)、サンカーリー (Jamal Sankari)、羽田正の用法を見ることで、ハウザの概念的な整理を図ることができる。フィッシャーはハウザを「宗教学習施設であるが、通常複数のマドラサによって構成される」とする [Fischer 1980: 290]。またサンカーリーは、インフォーマルな学術サークルをハウザ、マドラサの連合体をハウザ・イルミーヤ (Ḥawza al-‘ilmīya) とする。さらに羽田は、「12イマーム派の主要な廟所在都市に置かれる宗教学校。アラビア語ではハウザ。言葉の本来の意味は“場”で、宗教的な知識を得るための場、サークルのこと。具体的には、イマームやその近親の廟周辺に存在する複数のマドラサ全体を、“～のハウゼ”と呼ぶことが多い」とする [羽田 2002: 887]。

つまりハウザは、その語源である「場」から発した「学術サークル」という最大公約数的な概念のもとに、宗教学習施設としての学問の空間とそれらの宗教学習施設の幾つかが集まって構成される学問空間を指す言葉である<sup>3)</sup>。ただし先行研究においてはハウザやマドラサに関して、宗教学校

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

- 1) 例えばアハヴィー (Shahrough Akhavi) やシャナハン (Roger Shanahan) によって用いられている。アハヴィーは「宗教学習の施設」として、シャナハンは「シーア派の学問施設」としてハウザを用いている [Akhavi 1980: x; Shanahan 2005: 140]。
- 2) 例えばアブドゥル・ジャッバール (Faleh Abd al-Jabar) や森本一夫によって用いられる。アブドゥル・ジャッバールは「宗教学校の連合」として、森本は「神学校コンプレックス」としてハウザを用いている。[Abdul-Jabar ed. 2002: 8; 森本 2007: 291]。
- 3) ハウザと呼ばれるシーア派の教育施設はシーア派が居住している地域に見受けられることができる。当然ながらそれぞれの地域間には歴史的・社会的観点から差異があることが実証的に検証されなければならない。しかしここではハウザを両者を包含する上位概念として捉える。本稿では主としてイランの文脈で検討をくわえるため、

や神学校のような宗教教育施設として分析概念の宗教を用いて説明しているが、それに関しては補足的な説明が必要とされる。ハウザで育成される法学者の実態を考察しようとした場合、彼らの日常を構成しているものが宗教であるとの予断を持つことはできないためである。法学者の実態を捉えるために、卑近な例を紹介しよう<sup>4)</sup>。

ある日、マルジウ・アッ=タクリード (法学権威)<sup>5)</sup> である M. F. ランカラーニー師<sup>6)</sup> のテヘラン事務所を筆者は探していた。通りかかった中年の男性に、事務所の所在を尋ねると、彼は1軒の家屋を指差した。その家屋の側には、確かに法学権威ファーゼル・ランカラーニー事務所 (Daftar-e Marji'-e 'Āliqadar Ḥazrat-e Āyat Allāh al-'Ozmā Fāzel Lankarānī) と書かれた看板が掲げられていた。しかしそれは周辺の民家と同様にしかみえない一般的な家屋であり、本当にこれがそうなのかという疑問が頭によぎった。半分開いた門からなかを覗いてみても、やはり一般的な家屋である。思い切って門を潜り、中庭から内部を覗くと、2人の黒ターバンの法学者と2人の白ターバンの法学者が電話で話をしており、1人の中年男性がお茶をお盆に載せて歩いてるのが見えた。ここに違いないと思いながらドアをノックすると、電話をおいた黒ターバンの法学者がなかからゆっくりと出てきた。事務所を訪ねた経緯と目的を説明すると、快く事務所内へと案内してくれた。

事務所の内部は、白い壁にアルバイーンの時節がらイマーム・フサインの殉教を嘆く横断幕が飾られているほか、床に機械織りの絨毯が敷かれ、4人の法学者たちの机と背もたれが置かれているだけであった。座して筆者が観察していると、彼らは引切り無しにかかってくる電話に、物憂げに受話器をとっていた。電話の内容に耳を傾けてみると、離婚の相談にのっている様子であった。話が一段落し受話器を置くと、再び電話が金切り声をあげた。またもや離婚の相談であった。そのようなやり取りがしばらく続いた昼過ぎ、20代後半か30代前半ぐらいの男性の2人組が事務所を訪れた。彼らと法学者の1人が玄関口でしばらく立ち話した後、事務所内に迎え入れられた。

彼らのうちの1人が、案内をした法学者に対して質問を始めた。筆者が彼らの話に耳を傾けると、コンピューターのソフトウェアの使用に関する質問であった。時折2人組のもう1人がソフトウェアの説明をしながらやり取りが5分ほど続き、その結果、彼が使用しているソフトウェアに問題がないという結論が下された。2人は満足げな表情で礼を言い、裁定を下した法学者に見送られ去っていった。

ソフトウェアの使用を相談されていたその法学者に先ほどのやり取りに関して質問したところ、彼は「あれはイスラームの裁定だ」と答えた。筆者がソフトウェアとイスラームの結びつきに関して怪訝な顔をしていると、それは何の不思議でもないというふうには微笑み返してきた。時計の針は午後1時半を指していた。彼は私の質問から解放されたと言わんばかりに立ち上がり、昼休みの一時帰宅の準備をするために事務所の奥へと消えていった。事務所の応接間には今、筆者と事務所の世話係の男性の2人となった。しかし電話は決して鳴り止むことはなかった。世話役の男性は、4人の法学者の各々の電話を受け取るたびに、「午後の執務時間に再度電話してくれ」とくたびれた声で応えていた。

---

比較研究或いは比較を通じた統合的な議論を提供することはここでは目的としていない。

- 4) この調査は、魅力ある大学院教育イニシアティブ「臨地教育研究による実践的地域研究者の養成」の研究助成を受けて可能となった。
- 5) Marja' al-Taqlid. 12 イマーム・シーア派内で信徒の行動規範とされる高位の法学者のことを指す。19世紀半ば以降に一種の制度化がなされる。法学権威である法学者は習従する一般信徒からフムスを徴収する代わりに、一般信徒の信仰・社会生活上の疑問に答える。現在では多数の高位の法学者が法学権威であり、その実情については複雑化している。
- 6) Mohammad Fāzel Lankarānī. 1931年に法学者の家系に生まれる。コムでボルージュルディー師、ホメイニー師に師事した。革命時には直接的に運動に参加しなかったが、コムで教鞭をとりながら支持したとされる [Saleh (ed.) 1385: 305-9]。2007年6月16日に死去。

法学権威事務所には法学者の裁定を求めて、先の事例で示した離婚やコンピューターのほか、扶養手当、結婚結納金、異教徒との結婚方法、女子の成人の時期、一時婚の契約、性行為に関する質問などがよせられる。礼拝や齋戒など宗教的と読み取ることができる質問は4割程度である。E. ジャンナーティー (Ebrāhīm Jannāti) が毎週電子メールで送信する『1週間のファトワー集 (Eteftā'āt-e Haftē)』においても、離婚や扶養手当などの内容が半数以上を占める。このような彼らの実態は、宗教と世俗が対立関係にあるとアサド (Talal Asad) が指摘する西洋キリスト教世界の捉え方が、普遍的ではないことを明らかにしている<sup>7)</sup>。またこのような事例は宗教が社会に対して別々の実体として存在しているわけではないことを物語る。一方、ソフトウェアの使用に関してまでもイスラーム的な解釈がなされることを考えれば、イスラーム法によって解釈される対象は万物ということになる。従ってイスラームを西洋的な宗教概念では捉えられない。そうでなければ、あらゆるものがイスラームの範疇で語ることができるので、結果的に宗教と対立する世俗が存在しないことになる。しかし、例えば交通規則は明らかにイスラーム法の範疇外にある。それを考慮すると、現代イランにもイスラームの枠組みに含まれない領域がある。そこで現代イランにおけるイスラームの枠組みに含まれる領域と含まれない領域の関係を明らかにする必要がある。本稿の対象が法学者であることから、法学者の視点に立った、両者の関係を提起する。

ペルシア語において「世俗」を示す言葉はドンヤー (donyā) であり、「世俗」と同時に、現世を意味する言葉である<sup>8)</sup>。一方現世の対概念は来世を意味するアーヘラト (ākherat) であり、現世と来世のそれぞれの領域は理念的には宗教 (ディーン) によって規定されている。すなわち来世という領域の想定は宗教観に基づくものである。またそのような場合、現世は来世の生活の準備期間であり、現世は来世によって逆照射される領域である。それと同時に現世の諸行為が来世の利益を左右するため、理念的には現世と来世の諸事が宗教によって包摂されていることになる。現世であるからには、ドンヤーの領域には政治、経済、国家、社会も理念的には含まれる。しかし現実的には、ドンヤーとディーンすべてが不可分な存在として実在しているわけではない。

ドンヤーとディーンを結びつける存在、換言すればイスラームを社会的に実体化させる媒体がイスラーム法の解釈である。つまり現実的にはドンヤーとディーンに乖離がある「世俗」の領域があり、それは現時点においてイスラームの諸事として実体化が起こっていない、或いは実体化が希薄な領域である。一方ディーンによって包摂されている領域はイスラームの諸事として実体化された領域、畢竟、「宗教/世俗」の領域である。それゆえ現代イランは「世俗」と「宗教/世俗」の領域によって構成されることになる。

しかしこのような「世俗」と「宗教/世俗」には2点問題がある。第1に実体化が希薄な領域が何を契機として明確に実体化されるのか。第2に実体化が単に対象の宗教的領域への編入だけではなく、「世俗」と「宗教/世俗」それぞれの領域において、事象同士の関係性の再編が発生することである。それゆえイラン革命とその後の現代イランの展開は、「宗教/世俗」の実体化とそれとともなう相互の領域内での諸事の関係性の再編過程として捉えることができる。前者に関しては検証を別稿に譲ることとし、本稿においては後者を主要な問題とする。

後者の問題を考慮した際、実体化の媒体であり、再編の渦中にある法学者を育成するハウザはど

7) アサドは『宗教の系譜』において広汎な影響力をもつギーアツの「信仰」を宗教の基本的特徴とする立場が、キリスト教的な西洋の近代史の事実根ざした特殊な概念であることを明らかにした [アサド 2004]。また『世俗の形成』を通じて、現代西洋の宗教と世俗の二項対立的な思考様式に対して、西洋の固有の歴史的構築物であることを明らかにした [アサド 2006]。

8) ドンヤーの意味論は詳細に検討されなければならないが、別項にゆずる。ここではドンヤーの概念を明らかにすることを目的とする。

のような変容を経験しているのであろうか。またそのハウザは革命後のイランにおいて国家や社会にたいしてどのような位置づけがなされるのであろうか。現代イランにおけるハウザとは何か。最初にイラン国内において、また世界的にもシーア派学問の修学地として重要なコムとシーア派の関係を紐解く。次いで王政期および革命後のコムのハウザの実態を把握するとともに、それと国家という問題を検証し、イラン社会の動的把握の試みにおけるハウザの役割を提起する。

## 1. コムのシーア派都市としての史的展開とハウザの史的発展

シーア派にとってコム (Qom)<sup>9)</sup> は歴史的にも重要視されてきたが、現代にとっての重要性との間に断続性がある。それを明らかとするために、コムの史的発展を明らかにする。イラン・イスラーム共和国の首都テヘランから南西約 150km、乗り合いタクシーに乗れば 1 時間程度でコムに到着する。黒いチャードルで髪を隠す女性、白あるいは黒ターバンを頭に被る老若の法学者がその町の日常的な風景である。

イスラームとコムとの関係は、644 年のアブー・ムーサー・アシュアリー<sup>10)</sup> によるコム征服に遡る。コム征服から半世紀後の 8 世紀前半、アラブのアシュアリー族の移住<sup>11)</sup> を契機にシーア派化が始まる [森本 2002a: 378]。アシュアリー族は、スィッフイーの戦いやムフタルの乱に関与し、シーア派の草創期から関係をもっていた。より具体的な関係、つまり同家とシーア派イマームとの関係は、同家のムーサー (Mūsā ibn 'Abd Allāh ibn Sa'd ibn Mālik al-Ash'arī) がシーア派イマームのムハンマド・バーキル及びジャアファル・サーディクと親交をもったことに始まる<sup>12)</sup>。ムーサーは兄弟とともにイブン・アシュアス<sup>13)</sup> の陣営に参加していた。それゆえクーファでイマーム派として育ったムーサーがコムへ移住することで、彼はコムの最初のシーア派と言われる。一方、同地の一族内におけるシーア派の拡大は、一族の長となった彼の兄弟イーサーの息子ムハンマドとシーア派イマームであるムーサー・カーズィム及びムハンマド・ジャワードとの親交に起因する。このような一族内のシーア派の拡大を背景に、同家はイマームに対するフムス<sup>14)</sup> を支払っていた [Newman 2000: 39-41]。

9) コムの名称の語源に関しては、様々な伝承がある。例えばシーア派のハディースにある、ムハンマドによる「呪われたものよ、去れ (qum yā mal'ūn)」の言葉を典拠とする説を筆頭に、第 9 代イマーム、ムハンマド・ジャワードが命名したなど様々な説がある [Nāsir al-Sharī'a 1383: 111-2]。

10) Abū Mūsā ibn Qays al-Ash'arī. 預言者の教友であり、征服軍の指導者として活躍。2 代カリフ、ウマルによってバスラ総督、次いでクーファ総督に任命される。バスラ総督としてフーゼスターン地方の征服ほか、643/4 年にファールス地方に侵攻する。またスィッフイーの戦いに際しては、アリーとムアーウィヤの調停者を務める [Vaglieri 1986a: 695-6]。

11) アシュアリー族の移住に関しては、2 つの説がある。第一に、ウマイヤ朝のバスラ・クーファ総督ハッジャージュに対する 701 年のアブドゥル・ラフマーン・イブン・アシュアスの反乱の援助者に、サアド・イブン・マリク・アシュアリー (Sa'd ibn Mālik al-'Ash'arī) の息子が含まれており、サアド・ブン・マリクらがクーファからコムへと逃亡したとされる説である。一方、サアド・ブン・マリクの息子が 713 年頃より上記の説明よりも平和的にコムに到着したという説もある [Newman 2000: 39]。

12) 一方、彼の兄弟のイーサー ('Īsā ibn 'Abd Allāh ibn Sa'd ibn Mālik al-'Ash'arī) がシーア派イマームに贈与を行ったことから、最初の同家のイマーム派と考えられる場合もある。ナジャーシーによれば、イーサーは 6 代イマーム、ジャアファル・サーディク、7 代イマーム、ムーサー・カーズィムの教友で彼らの言行録を伝えるとされることから、生没は 8 世紀頃であると考えられる [al-Najāshī 1988: vol.2 149]。

13) 'Abd al-Rahmān ibn Muḥammad ibn al-Ash'ath. ハドラマウトの有力家系であるキンディー家の子孫。699 年から 702 年もしくは 703 年にかけてイラク総督ハッジャージュに対して反旗を翻す [Vaglieri 1986b: 715-9]。

14) Khums. イスラームで行われる 5 分の 1 税。スンナ派ではウマルの時代に廃止されたが、シーア派では現在も実施されている。税の対象とされるのは、本来は戦利品である。しかしシーア派ではその他に、海からえられた富、埋蔵された富、鉱物資源などが数えられる。一方、その分配対象は神、預言者、預言者一族である「お家の人々」、孤児、貧困者、旅人である。イマームの在時には、イマームが受け取り、それらを対象に分配することが原則とされた。しかし実際には分配の対象は 2 つに区分される。第一にイマームの取り分 (sahm al-imām) であり、分配対象の神、預言者、「お家の人々」がイマーム自身であると解釈されたことに基づく。第二に、サイイドの取り分 (sahm al-sāda) であり、孤児、貧困者、旅人は預言者一族の一員であると解釈されたことに基づく。これらのうち、第一に関してはイマームがお隠れすることで、法学者間の問題となった。イマームに代わり法学者が徴収可能であるかが主要な問題となり、議論が展開されていく。13 世紀のシーア派法学者ムハッキク・ヒッリーは、

このようにアシュアリー族内部におけるシーア派の拡大と同部族による同地の行政面での主体的な役割の結果、住民の間にシーア派が拡大した。また9世紀後半には、それまでイラン地域のシーア派の中心地であったレイで政治的・軍事的な宗派間対立が勃発する。レイの宗派間対立は同都市がシーア派とスンナ派によってモザイク状に構成されていたことに起因する一方、コムはシーア派がプレステージを確立していたため宗派間対立へと発展することがなく、そのため同地域のシーア派の中心となる [Newman 2000: 38]。そのコムにおいて9世紀末になると、アシュアリー家のサアド・ブン・アブドゥウッラー<sup>15)</sup>がシーア派の問題のある解釈、特にグラートの解釈の修正運動を行い、ハディース集が残される [Newman 2000: 42]。このような背景により、コムはシーア派の学問都市の1つとなった。

ハディース集積地としてのコムには別の一面がある。今日のコムには、歴史的に廟都市として発展したことを物語る黄金のドームをそなえた廟が建っており、同市の象徴となっている。そのコムの歴史的な廟都市としての発展の起源は816年に遡る。7代イマーム、アリー・リダーの妹ファータマは、マルヴに逗留する兄を訪問した帰途で死去する。彼女が死去し、埋葬された地こそコムである [Newman 2000: 41]。その後王朝の交代劇などの政治的な背景により、学問都市としての重要性は相対的に減少していくが、サファヴィー朝期になると、領内の参詣廟の1つとして再びシーア派内で重要視されるようになる。サファヴィー朝末期のアフガン族の侵攻により、コムは荒廃することになるが、カージャール朝による財政面での支援を受けながら復興が進められる [嶋本 1987: 74-86]。

一方、シーア派法学者は、サファヴィー朝の崩壊によってイラクの廟都市へと移住し、同地が彼らの活動の中心の場となる。このような状況の中、法学裁定に理性を重視するウスール学派が、法学裁定に伝承を重視するアフバル学派を徐々に駆逐していく。そのなかで19世紀初頭には高名な法学者ファーゼレ・コンミーがコムで指導的地位を示すなど、シーア派の学問都市の1つとして重要性をもっていた。しかしながらシーア派の一大学問都市としての復興は、1920年代に幕を開けることになる。

## 2. 王政期におけるハウザの実態

### (1) 王政期におけるコムの復活

コムは歴史的にもシーア派にとって重要性があった。しかし現代のようにシーア派の学問都市というよりは、近代以前には廟都市としての地位を宛がわれていた。それではコムはどのようにしてシーア派学問都市として復興を遂げたのであろうか。学問都市としての復興を支えた諸アクターの関係を明らかにしていきたい。

コムの一大学問都市としての復興は1921年、アラークに居を構えていた法学権威であるH. ヤズディー師<sup>16)</sup>が同地で教授活動を行ったことに始まる [Karbāschi 1380: 25; Shīrkhānī 1386: 33]。H. ヤ

法学者によるフムスの使用が可能であるという見解を下したが、一般的な見解には至らなかった。しかし17世紀頃になると、公正なムジュタヒドがフムスの徴収を可能とする見解が普及していた [Gleave 2004: 533-4]。シーア派内で法学権威制度が慣行となって以降、フムスの徴収と分配は、もっぱら法学権威の役割となっている。

15) Sa'd ibn 'Abd Allāh ibn Abū Khalaf al-Qummī al-Ash'arī. 9世紀後半から10世紀初頭に活躍したハディース学者であり、法学者である。モーメンによれば、イブン・バーバワイヒと並ぶ同時代のシーア派の重要な学者であったとされ、911/2年に亡くなったとされる [Momen 1985: 78; al-Najāshī 1988: vol.1 401-4]。また彼は『諸報と諸集団の書 (Kitāb al-Maḡālāt wa-al-Firaq)』というハディース集を編纂した。

16) Āya Allāh Ḥājī Sheykh 'Abd al-Karīm Ḥā'erī Yazdī. 1850/1年ヤズド行政区のメフルジェルドにムハンマド・ジャアファルの子として生まれる。ヤズドで学んだ後、ミールザーイェ・シーラーズィー師指導の下、イラクのサーマッラーで学ぶ。1900/1年にナジャフからアラークに移住した際、同地のハウザの基礎を築いたとされる

ズディー師はアラークにおいてハウザを築いていた。そこには 300 人ほどの学生がおり、各々に月 6 リヤールの俸給が授与されていた [Shīrkhānī 1386: 31]。また反英闘争によってイラクを追放されたハーンサーリー<sup>17)</sup> が H. ヤズディー師の招聘によりアラークを訪れた [Shīrkhānī 1386: 31]。その H. ヤズディー師をパーフェキー<sup>18)</sup> が説き伏せたことにより、コムは学問都市としての復興の幕が上がる。当時のコムでは 1916/7 年に F. コンミー<sup>19)</sup> が自身の学術サークル (ḥalqa-yi dars) を設立し、その後 1919/20 年<sup>20)</sup> にパーフェキーがコムに居を構えることになり、学問都市としての色彩が高まりつつあった [Shīrkhānī 1386: 32]。旧知の仲であったパーフェキーに懇願された H. ヤズディー師は、学生を引き連れコムに居を構える。テヘランの商人ミールザー・マフムード (Mīrzā Mahmūd) らの資金援助によって施設整備も行われ、学問都市としても再生される [Karbāschī 1380: 26-7]。

同時代におけるコムは学問都市化は、H. ヤズディー師の存在だけではなく、1920 年にイラクで起こった反英闘争を背景としている。いわゆる 1920 年暴動はシーア派の法学者と部族連合による英国のイラク植民地化への抵抗運動である。1920 年暴動は英国によって鎮圧される。ナジャフ、カルバラーをはじめ、同時代のシーア派の学問的中心であったイラクでは、暴動の結果、高位のシーア派法学者が追放されるという事態を招き、その多くがイランに身を寄せることになる。同時代にイラクの代替としてコムが学問都市として発展する歴史的な要因が存在していたのである。

H. ヤズディー師の指導下のコムでは、ホメイニー師、S. D. サドル<sup>21)</sup>、シャリーアトマダーリー師<sup>22)</sup>、R. ゴルパーイガーニー師<sup>23)</sup> ら著名なウラマーが学んだとされる [Shīrkhānī 1386: 33]。またコムは学問都市としての復興の一方で、同師は 1934 年に洪水に見舞われた際に学生を同地の復興運動に参加させる。それに加え、コムに最初の病院を建設するなど社会事業にも従事した [Karbāschī 1380: 33-4]。

[Shīrkhānī 1386: 31]。その後 1906 年にアラークを去り、ナジャフ、カルバラーへと遊学したが、1913/4 年にアラークの人々によって招聘され、同地で再びハウザの長となった。1920 年ファトゥフッラー・イスファハーニーの死後、法学権威となる。パーフェキーの招聘によりコムへ移住後、同地のハウザを再興し、1937 年 1 月 29 日に亡くなる [‘Abbās-Zāde 553-61]。

- 17) Āya Allāh Seyyed Moḥammad Taqī Khwānsārī. 1851 年にハーンサールに生まれる。A. ホラーサーニー師 (Ākhond Khorāsānī) や K. ヤズディー師 (Kāzem Yazdī) に学ぶ。イラクにおける 1920 年の反英闘争の結果、イラクを追われる。H. ヤズディー師の招聘により、アラークに身を寄せ、H. ヤズディー師のコム移動にともないコムへ移動する。H. ヤズディー師の死後もコムで教鞭をとり、学問都市としてのコムは復興を助け、1952 年に死去 [Idram 1382: 617-23]
- 18) Sheykh Moḥammad Taqī Bāfeqī Yazdī. 1875/6 年にムハンマド・パーキル・タージェル・パーフェキー (Moḥammad Bāqer Tājer Bāfeqī) の子として、ヤズド行政区のパーフェクに生まれる。1902/3 年にナジャフに遊学し、K. ヤズディー師らに師事する。コムに居住後に同地で教鞭をとり、同地の学問都市としての復興を図り、H. ヤズディー師を招聘する。1946 年 4 月 14 日に死去する [Ibrāhīm-Zāde 1386: 273-92]
- 19) Āya Allāh Moḥammad Feyz ibn ‘Alī Akbar Qomī. 1876/7 年にコムで生まれ、同地で初歩的教育を受けたのち、テヘラン、ナジャフ、サーマッラーなどに遊学し、K. ヤズディー師らに師事する。1912/3 年頃にコムに帰着し、以後同地の教学研究の復興に努め、H. ヤズディー師の招聘に成功する。1950 年に死去する [森本 2002b: 382]。
- 20) 嶋本によれば 1918 年とされる [嶋本 2007: 23]。
- 21) Āya Allāh Seyyed Saḍr al-Dīn Saḍr. ナジャフのシャリーフ家系に生まれ、後にマシュハドに移住。コムに移住し、H. ヤズディー師に師事する。H. ヤズディー師の死後は、1954 年に死去するまで、ハーンサーリー師らとともにコムハウザ運営に携わったとされる。レバノンのシーア派指導者として活躍した M. サドル師 (Imām Mūsā Saḍr) の父にあたる [Abāzārī 1382: 785; Shīrkhānī 1386: 34]。
- 22) Āya Allāh Moḥammad Kāzem Sharī‘atmadārī. 1905 年タブリーズに生まれ、同地で初歩的教育を受けた後、H. ヤズディー師らに学ぶ。ホルージュエルディー師の死後、同時代の法学権威の一人として認められ、M. ナジャフイー師や R. ゴルパーイガーニー師らとともにコムハウザの運営に携わる。ホメイニー師指導下の革命派に対し、イスラームの教義に反すると批判する。82 年 4 月にサーデク・コトブサーデ率いる反革命運動が明らかになると、自宅幽閉の身となり 86 年に死去する [Harr 1997: 329]。
- 23) Rizā Golpāyegānī. 1899 年 3 月 20 日、M. B. エマーム (Seyyed Moḥammad Bāqer Emām) の子としてゴルパーイガーニに生まれる。同地で教育を受けた後、アラークの H. ヤズディー師のもとで学ぶ。H. ヤズディー師のコム移動にともない、コムへと学業の拠点を移す。ホルージュエルディー師の死後、同時代の法学権威と認められ、シャリーアトマダーリー師や M. ナジャフイー師らとともにコムハウザの運営に携わる。1993 年 12 月 9 日に死去する [n. d. 1382: 945]。「法学者の統治」体制に関しては、賛否を明らかにしない態度をとる [富田 1997]。

このようなコムは学問都市としての復興の背景で、1925年にパフラヴィー朝が誕生した。パフラヴィー朝はカージャール朝期に続き社会的諸制度の近代化を図った。1931年には国民会議でシャリーア法廷閉鎖法案が可決された。また1928年には国民議会で男子服装改革令が可決された。それは一般男子への洋装の義務化とウラマーの伝統的衣装着用の義務化であり、ウラマーに対しては国家審査がなされるようになる [Momen 1985: 250]。それはイラン型の世俗主義的政策、換言すればイラン型の政教分離政策であり、法学者の「世俗」と「宗教／世俗」の世界観によって分けるのではなく、政治や社会に関係をもたない領域をイスラームにあてがい、諸宗教を国家や社会から周縁化させることであった。

このようなパフラヴィー朝による一連の政策によって、イスラームが周縁化され、イランにおけるマドラサの数が減少していく。そのさなか、1937年にH. ヤズディー師が死去する。H. ヤズディー師の死後、コムはハウザの運営がハーンサーリー、Ş. D. サドル、アーヤトッラー・ホッジヤトの管理下におかれることになるが、三者によるハウザの運営において、集権的な人物の不在が問題となり、1944年にボルージェルディー師<sup>24)</sup>をコムに招聘する [Karbāschi 1380: 96; Shīrkhānī 1386: 34]。ボルージェルディー師は同時代において、シーア派世界の大半が彼の法解釈を最上のものと位置づけるような法学権威であった。高名なボルージェルディー師のもとで、コムは18世紀後半以降シーア派最大の学問都市として君臨し続けたナジャフと同格のシーア派の学問都市となった [Momen 1985: 247]。

しかし1961年ボルージェルディー師没後、彼が独占していた法学権威の座は複数の法学権威によって引き継がれ、コムは他にマシュハドやナジャフに複数の法学権威が並列する状況が生まれた。レザー・シャーはイラクのM. ハキーム師<sup>25)</sup>を支持し、国内の法学権威を牽制し、「白色革命」を推し進めた。コムはハウザはシャリーアトマダーニー師、R. ゴルパーイガーニー師、M. ナジャフイー師<sup>26)</sup>の指導の下で、その運営が行われることになった<sup>27)</sup>。そのなかで、ホメイニー師は痛烈なパフラヴィー体制批判をおこなった。63年にホメイニー師が追放されるが、同師に影響を受けた若手法学者たちによって反体制運動が組織化されていった。

## (2) ハウザの教育システムとその運営

コムは法学権威の存在を中心としたアクターによって、シーア派の学問都市としての復興を遂げ

24) Seyyed Hoseyn Tabātabā'ī Borūjerdī. 1875年4月セイイェド・アリー・イブン・サイイェド・アフマド・タバータバーイー師 (Seyyed 'Alī ibn Seyyed Ahmad Tabātabā'ī) の子として生まれる。1947年アーヤトッラー・コンミー師 (Seyyed Āqā Hoseyn ibn Moḥammad Tabātabā'ī 1865-1947) の死後、同時代で唯一の法学権威となる。ボルージェルディー師の法学界における権威によりコムが同時代の学問的中心となる。またヨーロッパなどにモスクを建造するなど、国外に積極的な布教活動をおこなった。バハーイー教徒に対する撲滅運動及び農地改革に関しては政治的発言を行ったが、概して政治的静謐主義の立場であった。1961年3月31日に死去し、アザム・モスク (Masjed-e A'zam) に埋葬される [Abū'ī 1382: 662-72; Hairī 2004: 157-8]。

25) Sayyid Muhsin ibn Mahdī al-Tabātabā'ī al-Hakīm al-Najafī. 1889年にナジャフで生まれ、アーホンド・ホラーサーニー師やM. K. ヤズディー師 (Moḥammad Kāzem Yazdī) らに学ぶ。ナジャフで教鞭をとり、ボルージェルディー師の死後、シーア派法学界を先導する法学権威となる。同時代のイラクで普及していた社会主義や共産主義に対して批判的な姿勢をしめす。1970年にナジャフで没し、同地に埋葬される [Momen 1985: 313]。

26) Seyyed Shahāb al-Dīn Mar'ashī Najafī. 1897/8年にセイイェド・シャムスッディーン・マフムード・マルアシー (Seyyed Shams al-Dīn Mahmūd Mar'ashī 1919/20年没) の子としてナジャフに生まれる。ナジャフでA. カーシフル・ギター (Ahmad Kāshif al-Ghitā' 1953/4年没) らに師事した後、カルバラー、テヘランに遊学する。コムでH. ヤズディー師に師事し、以後同地で教鞭をとる。ボルージェルディー師の死後、同時代の法学権威に認められシャリーアトマダーニー師、R. ゴルパーイガーニー師らとともにコムはハウザの運営に携わり、1990年8月29日に死去する [Amānī 1382: 938]。R. ゴルパーイガーニー師と同様、「法学者の統治」体制に対して、賛否を明らかにしなかった [富田 1997]。

27) シールハーニー師はボルージェルディー師の死後にホメイニー師もまた法学権威として運営に参加していたとする [Shīrkhānī 1386: 36]。しかしハマダーニーによれば、ホメイニー師が法学権威の候補とされていなかったことが明らかである [Nīkbakht (ed.) 1382: 34-5]。

た。復活を遂げたコムでは、どのような活動が展開されていたのだろうか。フィッシャーは王政期のハウザにおいて参与観察を行い、ハウザを中世ヨーロッパの大学のように自由な学問の場であると評価している。フィッシャーなどが経験した王政期のハウザの活動の概観を描写し、革命期の活動と比較するための材料としたい。

王政期においては、概してマドラサへの入学時期、学習年数などに特に規制はなく、学生それぞれが自分の学力や人生設計に応じて決めることができた [桜井 2001: 92-3]。学生にとって重要なことは、どのマドラサに入学するかでなく、どの師に学ぶかであり、学生はよりよい師を求めて各地のマドラサを渡り歩き、師に認められるまで研鑽を重ねていた [桜井 2001: 93]。フィッシャーによれば、各々のマドラサに格の違いはなく、それゆえ学生は単に自分の志望に基づき学び、自身の能力や志向に応じて学問を修め、教師の選択も自由であった [Fischer 1980: 61]。そのマドラサ内には、入門 (jāme‘-e moqaddamāt)、標準課程 (dars-e soṭūh)、上級課程 (dars-e khārej) の3つの教育段階が存在する。

フィッシャーによれば、入門、標準課程、上級課程を修了するまでに約16年の歳月を必要とし、そのうち10年が入門と標準課程に費やされる。このようなハウザの教育方法は原則的に議論が学問の中心であるが、議論の方法は2種類に分けられる [Fischer 1980: 62]。第1に上級課程で行われている教育方法であり、教師に与えられた主題に対して議論を行うという方法である。その場合にはテキストは存在せず、参加者は法学や法源学を修めていなければならない [Fischer 1980: 63]。第2に『有益の書 (Kitāb al-Maqāṣib)』<sup>28)</sup> や『法源の十全 (Kifāya al-Uṣūl)』<sup>29)</sup> などの法学テキストを用いた教育方法であり、この場合議論は学生の間のみで行われる [Fischer 1980: 66]。

伝統的な教育カリキュラムをモデルとしているものの、新たなテキストの導入により、より合理的な教育活動が行なわれていた [Fischer 1980: 81]。新たなテキストとは、例えば入門で用いられる『平易な語形論 (Ṣarf-e Sāde)』や『平易な統語論 (Nahv-e Sāde)』、哲学の講義に際して用いられるアッラーメ・タバータバーイー<sup>30)</sup>の『哲学の開始 (Bedāyat al-Hekma)』である。テキストとともに英語やアラビア語会話の教育も重視されている [Fischer 1980: 81] また1973年には女子のためのマドラサが設立され、75年の時点で150人の生徒を抱えていた [Fischer 1980: 84]。

ハウザの役割は第一義的には、シーア派の学問教育を行う場である。しかしシーア派の学問教育は学生の育成だけでなく広報活動も行う。例えば、ハウザ付属の「神の道の館 (Dār-e Rāh-e Haqq)」は、国内のムスリムに対する布教機関である [Fischer 1980: 76]。また1971年には説教師や布教者を育成するための高等教育機関としてアリー・ホセイニー校 (Madrise-ye ‘Alī Hoseynī) が開校され、アフリカやパキスタンに説教師や布教者を派遣する計画が立てられてた [Fischer 1980: 83-4]。同校に先立って60年代半ばにシャリーアトマダーリー師によって開かれた「布教の館 (Dār al-Tabreghāt)」は、近代的な初等学校とイスラーム学の高等教育機関を繋ぐ役割を果たしていた。それは試験をともなった5年の教育プログラムと後者への入学試験に合格するための4年の準備プログラムを備えた施設である [Fischer 1980: 84]。

28) ムルタダー・アンサーリー師 (d. 1864) によって執筆された法学書。

29) アーホンド・ホラーサーニー師 (d. 1911) によって執筆された法源学に関する書物。

30) ‘Allāme Moḥammad Hoseyn Tabātabā’ī. 1903年にタブリーズの名門に生まれる。基礎教育を受けた後、1924年にナジャフに移り、法学、法源学を学ぶかわら、フサイン・バードクバイのもとで哲学を学び、同時期に神智学 (イルファーン) に傾倒する。36年にタブリーズに戻るが、ソ連によるアゼルバイジャン侵攻を機に47年にコムに移り、81年に没するまで同地でイスラーム哲学の復興に尽力を尽くす [村田 2002: 608]。アッラーメ・タバータバーイーによるシーア派信徒に向けて記されたシーア派の概説書『シーア派の自画像』が森本により訳として出版されている (cf. [タバータバーイー 2007])。



これらの施設の存在は、ハウザが社会に広く開かれた存在になったことを暗示する。また既述のようにボルージュルディー師のもとで、1940年代にはヨーロッパ各地にイスラーム・センターが建設され、中東以外にも広報活動が展開していた。さらに「布教の館」と連携して、ペルシア語やアラビア語の広報誌<sup>31)</sup>の発行も行われていた [Fischer 1980: 84]。

アハヴィーはこれら一連の活動を支えているのは非常に緩やかなインフォーマルな法学者間のネットワークであると指摘している [Akhavi 1980: 21]。また既述した通り、そのネットワークの基軸としての役割を果たしているのが、法学権威であるとされる [Shīrkhānī 1386: 32-5]。しかしながらフィッシャーの研究によれば、それは法学権威に限定されるものではなく、概して高位の法学者によるものであると考えられる。フィッシャーは1975年におけるコムハウザの指導者として、コドゥースィー<sup>32)</sup>、シャリーアトマダーリー師、R. ゴルパーイガーニー師、N. M. シーラーズィー師<sup>33)</sup>の名をあげている。彼らが指導的役割を果たした時代には、パフラヴィー朝がマドラサは近代化を阻止する障壁であると考えていた。そのような中で彼らはパフラヴィー朝の政策に対する学生の憂慮と危惧を抑えつつ、ハウザの運営を行っていた [Fischer 1980: 85]。

### 3. イラン革命とハウザの変容

#### (1) イラン革命によるハウザの教育制度の変化

1979年のイラン・イスラーム革命とその後の政治展開の末、法学者が政治主体を担う「法学者の統治」体制が樹立される。革命がもたらした政治システムの変化は、王政にかわって法学者が政治運営を担う政治構造の変化と一義的には捉えることができる。しかしそれと同時にイラン革命は法学者が政治運営を担うことによる政治システムの変化によって、「世俗」と「宗教／世俗」の諸事の諸関係の再編をもたらしした。そのような現象を、ハウザの組織運営に焦点を当てると同時に、入学条件やカリキュラムに着目し、王政期のハウザにおける教育活動と比較しながら教育機能の側面からも捉え、考察する。

コムハウザの組織運営は1980年代には、コム・ハウザ運営評議会 (Shūrā-ye Modīriyat-e Howze-ye ‘Elmiyye-ye Qom) によって行われている。ハウザ運営評議会の設置は、1979年にホメイニー師の代理人3名とR. ゴルパーイガーニー師の3名、さらにコム・ハウザ講師組合<sup>34)</sup>代表者3名による組織運営と組織化を検討する会議によって決められた [Shīrkhānī 1386: 55]。続く翌年にはハウザ運営評議会が設置されるとともに、各業務ごとに緩やかながら部局編成が準備され、81

31) ペルシア語誌として成人向けの『イスラーム学 (Maktab-e Eslām)』のほか、子供向けの『喜びの伝言 (Payām-e Shāde)』、青年向けの『新世代 (Nasr-e Now)』が発行されている。またアラビア語誌として『導き (al-Hadī)』が発行されている [Fischer 1980: 84]。

32) Āya Allāh ‘Alī Qodūsī. 1920年7/8月ネハーヴァンドに、アーホンド・モッラー・アフマドの子として法学者の家系に生まれる。コムでアッラーメ・タバータバーイーらに師事し、薫陶を受ける。イラン革命後の1981年9月5日に死去 [Qodūsī 1382: 859-65]。

33) Nāser Makārem Shīrāzī. 1926年にシーラーズに生まれ、小学校卒業後イスラーム教育を受ける。その後、コムで学んだ後、ナジャブに遊学する。コムではシャリーアトマダーリー師に師事し、「信徒たちの長」校 (Madrase-ye Amīr al-Mo’menīn) の長となり、革命以前からコムハウザの運営に携わる。革命後もR. ゴルパーイガーニー師らとともにハウザの運営に携わり、92年にはハウザ運営最高評議会委員に任命される。さらに94年、体制派が推進する法学権威アラーキー師が死去した際、コム講師協会から法学権威として推奨される。http://www.makaremshirazi.org/persian/modules.php?name=Static&page=biographi.htm

34) Jāme’-e Modarresīn-e Howze-ye ‘Elmiyye-ye Qom. ボルージュルディー師の没後、1963/4年にĀ. コンミー師 (Āqāyān Adherī Qomī), アミーニー (Amīnī), H. テフラニー (Hā’erī Tehrānī), ‘A. ハーメネイー師 (‘Alī Khāmene’ī), M. ハーメネイー (Mohammad Khāmene’ī 1939-), R. シーラーズィー (Rabbānī Shīrāzī), H. ラフサンジャーニー (Hāshemī Rafsanjānī), コドゥースィー、メシュキニー (Meshkīnī), M. ヤズディー (Mešbāh Yazdī), モンタゼリー師 (Montazerī) によって組織された11人組 (Jamī’yat-e Yāzdah Nafare) からの影響をもとに、コム講師の内組織化された組合 [Jawād-zāde and Šālih 1385: 54-68]。

年から本格的にハウザ運営評議会が機能し始める [Shīrkhānī 1386: 45]。

ハウザ運営評議会の設置及びそれを頂点とした運営形態の移行により、徐々に組織化が行われ、81年には、ハウザの運営方針として7つの計画が立てられる。第1に入門課程及び標準課程のカリキュラムの再編成であり、第2に学生の受け入れ並びに、各学生の管理登録規則が決定される。第3に語学教育や倫理教育の計画、第4により効率的な学問習得を図るための施設の設置、第5に各学科試験の設置とその役割の強化である。また第6にマドラサとそれに併設する寄宿舎の安全確保を目的とした運営・管理局の設置、そして最後にイラン各地のハウザの運営管理組織の設置である。

このような計画を実行に移すため、ハウザ運営評議会は、1992年2月19日の最高指導者ホームネイー師のコム訪問とその後の会議によって、コム・ハウザ最高評議会 (Shūrā-ye ‘Ālā-ye Howze ‘Elmīye-ye Qom) を頂点とし、各地の執行機関として運営機関 (Markaz-e Modīriyat-e Howze-ye ‘Elmīye) を抱える現在のシステムとなった。

組織運営面の変化と同時に、イラン革命は教育活動を入り口から変化させた。マドラサへの入学に際し、原則として高卒以上が入学条件となり、それとともに革命以前には存在しなかった入学試験制度が導入された [桜井 2001: 93]。シールハーニー (‘Abbās Zāre ‘Alī Shīrkhānī) によれば、入学試験が年に2度行われている<sup>35)</sup>。しかしながら中心的カリキュラムは、革命前後で大きな変化はみられず、標準課程を修了するまでにはやはり10年程度<sup>36)</sup>を要する<sup>37)</sup> [Shīrkhānī 1386: 133-4]。ただし、統一的なカリキュラムの作成という点や入門、標準課程では各々の講義に単位認定試験が課されるようになった点で変化が見られる。これらはフィッシャーが中世ヨーロッパの大学のような自律性をもった自由な学問の場として捉えていた王政期のハウザに比して、より組織化された学問の場となっている。

先行研究によって提示されている革命前のカリキュラムと比較すると、現在の教育では倫理教育にも重点がおかれていることが明らかとなる。第1段階から第6段階のカリキュラムを見るかぎり、年間約30時間程度の倫理教育プログラムが組まれている。倫理教育のように革命以前では強調されてこなかった教育プログラムに加え、テキストの変化も指摘できる。男子学生の法源学の授業に際して使用されるテキストとしてモタツハリ<sup>38)</sup>の『源 (Usūl)』、また女子学生の教育に際してもモタツハリ師の『哲学の熟知 (Āshenā’ī bā Falsafe)』が使用されている [Shīrkhānī 1386: 307, 317] (付録2 ハウザのカリキュラム参照)。

## (2) 革命によるハウザの変化の捉え方

イラン革命によって、ハウザは組織運営の側面においても、教育の側面においても変化した。このような変化に対する先行研究における、イスラームと政治との関係の変化に対する捉え方を明ら

35) シールハーニーによれば、186のマドラサがホルダード月に、168のマドラサでシャフリーヴァル月に試験を行い、ホルダード月で9500人、シャフリーヴァル月で6000人が試験に臨んだ [Shīrkhānī 1386: 111]。

36) 桜井は、標準段階を修了するまでに8年程度を要するとしている [桜井 2001: 93]。

37) カリキュラムの第1段階から第3段階にあたる入門段階では、革命以前と同様に、アラビア語文法、法学、論理学の基礎を学ぶ。第1段階では年間650時間、第2段階では年間610時間、第3段階では年間650時間の基本的な講義時間に加え、クルアーンの暗誦やイスラーム史などの学習時間が設定されている。続く第4段階から第10段階にあたる標準課程では、4つの目的のもとに法学や法源学を主体とした教育が展開される。第1には法学や法源学の原典に対する理解の向上であり、第2にクルアーンの章やハディースからの推断 (istinbat) に精通すること、第3に法学、法源学の過程を完全に学ぶこと、最後に一般教養を身につけつつ、イスラームの信条を身に着けることである [Shīrkhānī 1386: 134]。

38) Mortadā Motahhari. 1920年にホラーサーン州に生まれ、ホメイニー師やアッラーメ・タバータバーイーに学ぶ。54年にテヘラン大学神学部教授となり、イスラーム哲学を講じる。ホメイニー師の指導する反政府運動に参加し、イラン革命で指導的役割を果たした一人とされる。79年5月1日に反法学者政治運動組織により暗殺される [松本 2002: 1006]。

かにする。

桜井は革命によるコムハウザの変化を、第1にシーア派の学問都市としてのコム地位の変化、第2にハウザの機能的変化と見る。前者に関し、「フェイズイーイ宗教学院をはじめ、優秀な教授陣を抱える名門宗教学院が集まっているために、イスラーム法学者を志す者にとってこの地での研鑽は不可欠となっている」と述べる〔桜井 2006: 217-8〕。また後者に関し、「コムは、同地で教育を受けたウラマー（イスラーム学者・識者たち）が政権の中樞を握ったことで、政治的にも学問的にもシーア派の中心として不動の地位を築くことになった」と述べる〔桜井 2006: 217〕。

このような変化のみならず、世俗の教育機関との連携という新たな変化も生まれている。イラン・イラク戦争後の経済復興要求の高揚のなかで、政府諸機関でも大学卒業の実務家が重用されるようになる。そのような中で、宗教学院生が不利にならないように、宗教学院と一般の国立大学に在籍し、双方の単位を修得するという「宗教学院と大学」というプログラムが編まれた〔桜井 2006: 218〕。また M. アルダビーリー師<sup>39)</sup>によって創設されたモフィード大学のように、宗教学院で一定の期間修学した者だけに出席を許可する大学が開設された〔桜井 2006: 218〕。

さらに革命以降、国家的戦略と結びつきながらシーア派の教義信条の普及を目的とした布教活動が活発に行われる。桜井によれば、布教活動の担い手は外交官とウラマーである。前者は在外大使館に併設されるイラン文化センターにおいて、ペルシア語講座、イスラーム関係講座やその他各種講演会などの文化活動を通じてイスラーム革命の理念の普及を図っている。一方後者はラマダーンやアーシューラーなどの宗教儀式を通じて信徒が集まる時期に、世界各地のシーア派コミュニティに出向いて礼拝の指導や説教を行っている。さらに各地のシーア派コミュニティにマドラサや学習センターを開設し、優秀な学生をコムに留学させるという方法をとっている〔桜井 2001: 96-7〕。留学希望者の多いシーア派コミュニティに対しては、コムから試験官が派遣され選抜試験が実施されているほか、より多くの学生の受け入れのためにペルシア語の短期習得プログラムやペルシア語を母語としない学生用のカリキュラムが作成されている〔桜井 2006: 216-9〕。またエマーム・ホメイニー校のように非イラン人専用のマドラサも設立される。

桜井によるこのようなハウザの変化の記述は、法学者が政治領域を担うようになったことで、ハウザが国家の人材育成機関として位置づけられ、国家戦略に結びついて変貌したとの印象を与える。しかし本当に、ハウザが王政期における自律性を喪失してしまい、国家とシーア派法学界はひとつの実体として捉えられるようになったのだろうか。

#### 4. 革命イランにおける法学者の役割とハウザの動態的把握の提起

##### (1) 法学権威機構の変化と連動するハウザの変容

ハウザは言うまでもなく、シーア派法学界の基礎をなす。シーア派法学界を改めて概観した際、ハウザにおける法学権威の重要性は、法学権威がハウザの復興に深く関わってきたことから窺える。シーア派法学界における法学権威と社会との関係を捉え、それとハウザの展開を連動させることで、イラン革命によるハウザの変化を再考できないだろうか。

現代的な法学権威は19世紀半ばに遡ることができる。当時ウスूल学派内部では、他学派との

39) Seyyed 'Abd al-Karīm Mūsavi Ardabili. 1926年1月27日法学者セイイェド・アブドルラヒーム (Seyyed 'Abd al-Rahīm) の子としてアルダビールに生まれる。同地で初歩的教育を受けた後、1943/4年からコムで R. ゴルバーイーガーニー師らに学ぶ。ナジャフへ遊学の後に、イランへ戻る。イラン革命後、1980年2月に検事総長に就任、さらに81年6月に最高裁判所長官となり、89年の憲法改正にともなう司法機構改革まで同職を務めた〔富田 1993: 68-9〕。また第一回専門家会議の委員を務める。現在の法学権威の一人とされる。http://www.ardebili.com/Per/About/default.asp

論争に際し、学派の組織化、集権的な法学権威の確立という目的から、法学者内部のヒエラルキーを形成していった [Cole 1983: 33-46; Mousavvi 1996: 279; Walbridge 2001: 4]。次第に法学者の峻別が行われ、法学の権威の序列が整備される。H. ナジャフィー師<sup>40)</sup>の死後、M. アンサーリー師<sup>41)</sup>が法学権威に就任して以来、卓越した法学者がイスラーム法の最高解釈者である法学権威となること、半ば制度的に展開された。法学権威は法学界の位階構造を示すと同時に、タバコ・ボイコット運動やイラン立憲革命に見られるように、社会に対して絶大な影響力を及ぼす存在である<sup>42)</sup>。

法学権威ボルジェルディー師の死後、1962年のモハンマド・レザー・シャーによる農地改革によって、法学者たちは収入源であった農地を失った。フィッシャーによれば、その代替物としてフムスが主たる収入源とされ、法学者は継続的に国家から独立した財源を確保していた [Fischer 1980: 85]。またテヘランで、イスラーム知識人のみならずテクノクラートを交えた宗教会議が実施され、議論の末にフムスを経済基盤の中心に据えることが決められた [Halm 1991: 122-3]。そしてそのフムスの徴収は法学権威の責任で行われた。

フムスの徴収は、社会に対して目を向けていくことを法学権威に強いた。それは同時にハウザにとっても社会に目を向けていく契機であったのではないだろうか。女子のマドラサの設置や布教者育成機関の設立、また広報誌の発行などは、ハウザが社会に目を向けるとともに、社会に対して開かれた空間へ変化していったことを物語っているのではないだろうか。このように社会との関わりが密になっていくなか、イラン革命が発生する。そのなかでハウザが組織化され、それとともに国家運営に必要な人材を輩出するようになったのは、社会に目を向けるようになった法学者のひとつの論理的帰結として捉えることができるであろう。

## (2) ハウザの動態的把握の提起

現在のハウザの状況から考察した場合、イラン革命とその後の展開による法学界の国家権力への一元的な構造化という見方は間違いであるといえる。ハウザの運営に関していえば、コム・ハウザ講師組合という存在が浮き上がってくる。コム・ハウザ講師組合はテヘランの政治舞台にプレゼンスをもつ法学者が委員として多く含まれ、コム・ハウザ最高評議会委員をかねる者も含まれている。また彼らの政治的なプレゼンスは2つの事例から明らかである。第1に82年、90年、98年の3度の専門家会議選挙に際し、公認候補者を選出してきたこと (cf. [Sālih 1985: 599-618])。第2に94年に法学権威であったアラキー師<sup>43)</sup>の死後には、講師組合から法学権威として新たに複数の法学者が推薦されたことである<sup>44)</sup>。コム・ハウザ講師組合は、権力ブロック中枢とシニア派法学界

40) Shaykh Muḥammad Ḥasan ibn Bāqir al-Najafī. 1787年、ナジャフに生まれる。J. カーシフルギター (Ja'far Kāshif al-Ghiṭā') やシャイヒー学派の A. アフサーイー (Shaykh Ahmad Aḥsā'ī) の下で学ぶ。ナジャフで教鞭をとり、次代を担う法学者の育成を行い、ナジャフを指導する法学者となる。『言葉の宝石 (Jawāhir al-Kalām)』など法学に関する著作物を多数著し、1849/50年に没する [Momen 1985: 318]。

41) Shaykh Murtaḍā ibn Muḥammad Amīn Ansārī Tustarī. 1799年ごろ、イランのデズフルに生まれる。カルバラーやカーシャー、ナジャフで学んだのち、ナジャフに居を構える。法源学の発展上、重要な役割を果たした。『有益の書 (Kitāb al-Maḡāsib)』などの著作物を残す [富田 2002: 102]。H. ナジャフィーの死後、シニア派法学界の指導的地位となり、1864年に没する。

42) しかしながら法学権威が恒常的に社会的な影響力を発揮するわけではない。例えばモハンマド・レザー・シャー期に法学権威であったボルジェルディー師は、概して政治的静謐主義の立場をとり、社会に対して積極的な立場を示さなかった。

43) Āya Allāh 'Alī Arākī. 1894年12月23日にミールザー・ファラーハーニー (Mīrzā Farāhānī) の子としてアラークで生まれる。アラークで H. ヤズディー師やハーンサーリーに師事する。H. ヤズディー師のコム移動後、コムで学習を継続する。革命以降はコムに金曜礼拝導師に任命される。89年のホメイニー師の死後、法学権威に推奨される。94年10月15日に死去 [Khū'ī 1382: vol.2 951-4]。

44) M. F. ランカラーニー師、M. T. ベフジャト師 (Mohammad Taqī Behjat 1911-), 'A. ハーメネイー師、H. V. ホラーサーニー師 (Hoseyn Vāhid Khorāsānī 1921-), M. J. タブリーズイー師 (Mīrzā Javād Tabrīzī 1926-2006)、M. Sh.

の媒介という存在から一步踏み出し、現体制の屋台骨を支える存在となっているといえる。

しかしこれらの活動は政治への構造化ではなく、むしろ逆なのではないだろうか。ハウザの運営機関が国家に構造化されたと安直に捉えられないためである。確かに現在のコム・ハウザ最高評議会委員長モハンマド・モーメン (Moḥammad Mo'men) はコム・ハウザ講師組合委員であると同時に、セムナン選挙区選出の専門家会議議員である。しかし専門家会議が最高指導者の選出および罷免権をもつということ、またシーア派法学界の序列を考慮すると、ハウザが国家に構造化されたのではなく、国家がハウザの執行機関として構造化されたと言える。またコム・ハウザ最高評議会やコム・ハウザ運営機関は入門や標準課程のカリキュラム管理およびハウザに付随する諸機関を統括する行政的な役割を担うに留まる。ハウザの教科書やカリキュラムの決定にしても、法学権威の意見を仰ぎ、彼らを尊重する姿勢を示す必要がある [Rasā News, 6 Oct. 1386]。

現在イラン国内には十数名の法学権威が存在する [Rosiny 2003]。彼らが開く上級課程の授業は、革命以降も各人の授業スタイル、授業テーマによって異なり、ハウザの運営機構から独立している [Sīrkhānī 1386: 134]。法学権威が影響を及ぼすのは、将来法解釈権をもつであろう学生たちであり、それゆえ法学権威は法学界を実質的に先導しているといえる。それと同時に法学権威はフムスの徴収によって課税地のミクロな人的ネットワークとフムスの集積地におかれた複数の支部からなるネットワークをもつ。また彼らの事務所における日常的な信徒との接触が彼らに潜在的に社会を先導する機会になっているといえるのではないだろうか。こうした法学権威を頂点とし、合理化されたハウザの組織運営に政治分野で活躍する法学者が多数含まれているのである。

既述のように、イスラームにおいては政治や社会が含まれる「世俗」と「宗教」は不可分の連続体であり、「世俗」的事柄が「宗教」的領域に組み込まれた際、その内部において諸関係の再配置が展開していると提起した。その再配置を動的に捉える必要性をハウザが示している。ハウザを国家や社会にまたがって両者の中間に位置する動態的存在として捉えることで、イラン国家が非民主的であるとか、イランに市民社会が存在しないといった議論から脱却し、イランの国家や社会をもまた動的に把握することができるのではないだろうか。

## 参考文献

### 日本語文献

- アサド, T. 2004. 『宗教の系譜——キリスト教とイスラームにおける権力の根拠と訓練』 中村圭志訳. 岩波書店.
- . 2006. 『世俗の形成——キリスト教、イスラーム、近代』 中村圭志訳. みすず書房.
- 桜井啓子. 2001. 『現代イラン——神の国の変貌』 岩波書店.
- . 2006. 『シーア派』 中央公論社.
- 佐藤秀信. 2004. 「『新保守』の台頭——第7期イラン国会議員選挙経過と展望」 『イスラーム世界』 63.
- 嶋本隆光. 1987. 「19世紀のコム (Qom) 市——王朝の庇護と宗教都市の発展」 『オリエント』 30(1), pp. 72-89.
- . 2007. 『シーア派イスラーム——神話と歴史』 京都大学学術出版会.

ザンジャーニー師 (Mūsā Shobeyrī Zanjānī 1928-), N. M. シーラーズィー師が法学権威として紹介された [富田 1997: 42; Šālih (ed.) 1385: vol.8: 213-4].

- 鈴木均. 2006. 「イラン——2005年選挙と政治潮流の転換」 福田安志編『アメリカ・ブッシュ政権と揺れる中東』アジア経済研究所.
- タバータバーイー, M. 『シーア派の自画像』 森本一夫訳, 慶応義塾大学出版会.
- 富田健次. 1993. 『アーヤトッラーたちのイラン——イスラーム統治体制の矛盾と展開』 第三書館.
- . 1997. 「ヴェラーヤテ・ファギーフ体制とマルジャエ・タグリード制度」 『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』 35, pp. 39-58.
- . 2002. 「アンサーリー、モルタザー」 大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』 岩波書店, pp. 101-102.
- 羽田正. 2002. 「ホウゼ」 大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』 岩波書店, p. 887.
- 松永泰行. 2002. 「イスラーム体制下における宗教と政党——イラン・イスラーム共和国の場合」 日本比較政治学会編『現代の宗教と政党——比較のなかのイスラーム』 早稲田大学出版部.
- 松本耿郎. 2002. 「モタッハリー」 大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』 岩波書店, p.1006.
- 村田さち子. 2002. 「タバータバーイー, モハンマド・ホセイニ」 大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』 岩波書店, p. 608.
- 森本一夫. 2002a. 「コム」 大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』 岩波書店, p. 378.
- . 2002b. 「コンミー」 大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』 岩波書店, p. 382.
- . 2007. 「訳者解説」 M. タバータバーイー 『シーア派の自画像』, 森本一夫訳. 慶応義塾大学出版会, pp. 289-296.

#### 欧米文献

- Abdul-Jabar, F, ed. 2002. *Ayatollahs, Sufis and Ideologues: State, Religion and Social Movements in Iraq*. London: Saqi Books.
- Akhavi, S. 1980. *Religion and Politics in Contemporary Iran: Clergy-State Relations in the Pahlavī Period*. New York: State University of New York Press Albany.
- Cleave, R. 2004. s. v. “Khums,” *EF*.
- Cole, J. R. 1983. “Imami Jurisprudence and the Role of the Ulama: Mortaza Ansari on Emulating the Supreme Exemplar,” in Nikki R Keddie ed., *Religion and Politics in Iran: Shi'ism from Quietism to Revolution*. New Haven: Yale University Press.
- Fischer, M. M. J. 1980. *Iran: From Religious Dispute to Revolution*. Cambridge: Harvard University Press.
- Hairi, A. 2004. s. v. “Burūdjirdī,” *EF*.
- Halm, H. 1991. *Shiism*. Edinbrugh: Edinbrugh University Press.
- Harr, J. G. J. T. 1997. s. v. “Sharī‘atmadārī,” *EF*.
- Momen, M. 1985. *An Introduction to Shi‘i Islam*. New Haven and London: Yale University Press.
- Moussavi, A. K. 1996. *Religious Authority in Shi‘ite Islam*. Kuala Lumpur: International Institute of Islamic Thought and Civilization.
- Nasr, S. H. 1987. *Traditional Islam in the Modern World*. KPI: London.
- Newman, A. J. 2000. *The Formative Period of Twelver Shī‘ism: Ḥadīth as Discourse Between Qum and Baghdad*. Richmond: Curzon Press.
- Rosiny, S. 2003. “Internet et la Marja‘iyya: L’Autorité Religieuse au Défi des Nouveaux Médias,” *Maghreb-Machrek* vol.178, pp.59-74.

- Sankari, J. 2005. *Fadlallah: The Making of a Radical Shi'ite Leader*. London: Saqi Books.
- Shanahan, R. 2005. *The Shi'a of Lebanon: Clans, Parties and Clerics*. London & New York: Tauris Academic Studies.
- Vaglieri, L. V. 1986a. s. v. "al-Ash'arī, Abū Mūsā," *EP*.
- . 1986b. s. v. "Ibn al-Ash'th," *EP*.
- Walbridge, L. S. 2001. "Introduction: Shi'ism and Authority," in L. S. Walbridge ed., *The Most Learned of Shi'a: The Institution of the Marja' Taqlid*. Oxford: Oxford University Press.

ペルシア語文献

- Abāzarī, 'A. R. 1382. s. v. "Emām Mūsā Šadr," in Pazhūheshgarān-e Ḥowze-ye 'Elmīye-ye Qom, ed., *Golshan-e Abrār: Kholāšeh-ye az Zendeḡi Asveh-hā-ye 'Elm va 'Aml*, Qom: Nashr-e Ma'rūf, vol.2.
- 'Abbās-Zāde, S. 1382. s. v. "Sheykh 'Abd al-Karīm Ḥā'erī Yazdī," in Pazhūheshgarān-e Ḥowze-ye 'Elmīye-ye Qom, ed., *Golshan-e Abrār: Kholāšeh-ye az Zendeḡi Asveh-hā-ye 'Elm va 'Aml*, Qom: Nashr-e Ma'rūf, vol.2.
- 'Abīrī, 'A. 1382. s. v. "Seyyed Ḥoseyn Borūjerdī," in Pazhūheshgarān-e Ḥowze-ye 'Elmīye-ye Qom, ed., *Golshan-e Abrār: Kholāšeh-ye az Zendeḡi Asveh-hā-ye 'Elm va 'Aml*, Qom: Nashr-e Ma'rūf, vol.2.
- Amānī, M. R. S. 1382. s. v. "Mar'shī Najafī," in Pazhūheshgarān-e Ḥowze-ye 'Elmīye-ye Qom, ed., *Golshan-e Abrār: Kholāšeh-ye az Zendeḡi Asveh-hā-ye 'Elm va 'Aml*, Qom: Nashr-e Ma'rūf, vol.2.
- Ibrāhīm-Zāde, Ḥ. 1386. s. v. "Sheykh Moḥammad Taqī Bāfeqī," in Pazhūheshkade-ye 'Elmī. ed., *Golshan-e Abrār: Kholāšeh-ye az Zendeḡi Asveh-hā-ye 'Elm va 'Aml*, Qom: Nūr al-Sajjād, vol.7.
- Īdram, Ḥ. 1382. s. v. "Seyyed Moḥammad Taqī Khvānsārī," in Pazhūheshgarān-e Ḥowze-ye 'Elmīye-ye Qom, ed., *Golshan-e Abrār: Kholāšeh-ye az Zendeḡi Asveh-hā-ye 'Elm va 'Aml*, Qom: Nashr-e Ma'rūf, vol.2.
- Javād-zāde, A. R. and S. M. Šālīḥ. 1385. *Jāme'-e Modarresīn-e Ḥowze 'Elmīye-ye Qom: Az Āghāz tā Aknūn*, Tehrān: Markaz-e Esnād-e Enqelāb-e Eslāmī, vol.1.
- Karbāschī, Gh. 1380. *Ta'rikh-e Šafāhī-ye Enqelāb-e Eslāmī*. Tehrān: Makaz-e Esnād-e Enqelāb-e Eslāmī.
- Khū'ī, 'A. Š. 1382. s. v. "Āya Allāh al-'Uzmā Arākī," in Pazhūheshgarān-e Ḥowze-ye 'Elmīye-ye Qom, ed., *Golshan-e Abrār: Kholāšeh-ye az Zendeḡi Asveh-hā-ye 'Elm va 'Aml*, Qom: Nashr-e Ma'rūf, vol.2.
- N. D. 1382. s. v. "Āya Allāh al-'Ozmā Golpāyḡānī," in Pazhūheshgarān-e Ḥowze-ye 'Elmīye-ye Qom, ed., *Golshan-e Abrār: Kholāšeh-ye az Zendeḡi Asveh-hā-ye 'Elm va 'Aml*, Qom: Nashr-e Ma'rūf, vol.2.
- Nīkbakht, R., ed. 1382. *Khāṡerāt va Mubārizāt-i Ḥojjat al-Eslām Ḥoseynī Hamadānī*. Tehrān: Makaz-e Esnād-e Enqelāb-e Eslāmī.
- Qodūsī, M. H. 1382. s. v. "Shahīd Āya Allāh Qodūsī," in Pazhūheshgarān-e Ḥowze-ye 'Elmīye-ye Qom, ed., *Golshan-e Abrār: Kholāšeh-ye az Zendeḡi Asveh-hā-ye 'Elm va 'Aml*, Qom: Nashr-e Ma'rūf, vol.2.
- Šāleḡ, S. M. 1385. *Jāme'-e Mudarresīn-e Ḥowze-ye 'Elmīye-ye Qom: Az Āghāz tā Aknūn*, Tehrān: Enteshārāt-i Markaz-e Esnād-e Enqelāb-e Eslāmī, vol.2.
- Šāleḡ, S. M., ed. 1385. *Jāme'-e Mudarresīn-e Ḥowze-ye 'Elmīye-ye Qom: Az Āghāz tā Aknūn*, Tehrān: Enteshārāt-i Markaz-e Esnād-e Enqelāb-e Eslāmī, vol.3-8.
- Shīrkhānī, A. Z. A. 1386. *Tahavvolāt-e Ḥowze-ye 'Elmīye-ye Qom pas az Pīrūzī-ye Enqelāb-e Eslāmī*. Tehrān: Enteshārāt-e Markaz-e Esnād-e Enqelāb-e Eslāmī.

アラビア語文献

al-Najāshī, Abū al-‘Abbās Aḥmad b. ‘Alī. 1988. *Rijāl al-Najāshī: Aḥad al-Uṣūl al-Rajālīya*. 2vols. Bayrūt: Dar al-Adwā’.

オンライン文献

マカーレム・シーラーズィー師・オフィシャルサイト <http://www.makaremshirazi.org/persian/modules.php?name=Static&page=biographi.htm> (2007年8月21日確認)

ムーサヴィー・アルダビーリー師・オフィシャルサイト <http://www.ardebili.com/Per/About/default.asp> (2007年8月21日確認)

通信社

*Rasā News*.



付録

付録1: コムのハウザ年表

年	出来事	備考
1900/1年	H. ヤズディー師、アラークへとナジャフを去る [Shīrkhānī 1386: 31]	H. ヤズディー師、アラークのハウザの基礎を形成
1907年	H. ヤズディー師、アラークを去り、再びナジャフへ。その後カルバラーへ向かう [Shīrkhānī 1386: 31]	イラン憲法の発布
1913/14年	H. ヤズディー師、アラークの人々の招聘により、再びアラークへ [Shīrkhānī 1386: 31]	H. ヤズディー師、同地域のハウザの長となる
1916/17年	F. クンミー、自身の学術サークル (ḥalqa-yi dars) をコムで設立	
1919/20年 <sup>45)</sup>	バーフィキー、コムに居住開始 [Shīrkhānī 1386: 32]	
1920年	イラクで反英暴動が勃発 イルファーンと哲学の教授であるアブル・ハサン・カズウィーニー師 (Āya Allāh Sayyid Abū al-Ḥasan Rafī‘ī Qazwīnī) ハーンサーリー師、H. ヤズディー師の下で学び始める [Shīrkhānī 1386: 31]	アラークには 300 人ほどの学生 (月 6 リヤールの俸給) [Shīrkhānī 1386: 31]
1921年	H. ヤズディー師、コムのハウザの懇願によりコムに移住 (ホメイニー師もコムへ) <sup>46)</sup>	コムのハウザの形成の開始 [Karbāschi 1380: 25; Shīrkhānī 1386: 33] テヘランの商人ミールザー・マフムードからの資金援助 [Karbāschi 1380: 26-7] フェイズイーエ学院 (Madrāse-ye Feyziye) の復興 [Karbāschi 1380: 27-30]
1925年	国民議会によりカージャー朝の廃絶及びパフラヴィー朝の成立が可決	マドラサ数 282 学生数 5984 人
1934年	コム、洪水に見舞われた際、H. ヤズディー師の指示により学生が復興活動に参加 [Karbāschi 1380: 33-4]	同時期にコムで最初の病院が建設 [Karbāschi 1380: 34]
1936年	H. ヤズディー師死去 コムのハウザ、ハーンサーリー師、Ş.D. サドル師、アーヤトッラー・ホッジャト師の管理下に [Karbāschi 1380: 96; Shīrkhānī 1386: 34-5]	
1941年	ボルージェルディー師、コムへ	ホメイニー師の哲学の授業が有名 [Karbāschi 1380: 95]
1940s	ヨーロッパ各地にイスラーム・センターが建設 [Shīrkhānī 1386: 82]	
1961年	ボルージェルディー師死去 コムでは複数マルジャア (シャリーアトマダーリー師、R. ゴルパーイガーニー師、アフマド・ハーンサーリー師、M. ナジャフィー師) が並立	
1962年	農地改革法発布	
1963年	ホメイニー師の追放	
1960s ~ 70s	コムのハウザ、シャリーアトマダーリー師、R. ゴルパーイガーニー師、M. ナジャフィー師の監督下に 布教機関の設立	
1979年	パフラヴィー朝が滅亡し、イラン・イスラーム共和国が成立	

年	出来事	備考
1981年	運営評議会、機能開始 1. 文法教育ならびに標準教育 (darsī-ye adabiyāt va soṭūh) のカリキュラム編集 2. 学生の受け入れ並びに登録規則の決定 3. 語学教育の計画 4. 養成組織の設立 5. 学科試験の強化 6. マドラサ運営局の設置とマドラサ併設の学生宿舎の設置並びにその安全確保 7. 地方のハウザの運営管理組織の設置	
1983年	第一回専門家会議選挙	
1989年	最高指導者ホメイニー師が死去。'A. ハーメネーイ師が専門家会議により最高指導者に選出。アラーキー師が法学権威に推奨	
1991年	エマーム・ホメイニー治療保険センター (Markaz-e Bīme-ye Darmānī-ye Emām Khomeynī) がハウザ奉仕センター (Markaz-e Khadamāt-e Howze-hā-ye 'Elmiyye) に改名 第二回専門家会議選挙	
1992年	'A. ハーメネーイ師、コム訪問 [Shīrkhānī 1386: 48] 広報専門教育センター (Markaz-e Āmūzeshhā-ye Takhaṣṣoṣī-ye Tablīgh) が設立 [Shīrkhānī 1386: 77] コムハウザ問題に関する会議がダール・アッ = シャファアールで開催	
1999年	第三回専門家会議選挙	
1370s(1991-2001)	海外広報活動の管理を広報部に一括 [Shīrkhānī 1386: 82]	

45) 嶋本によれば 1918 年とされる。[嶋本 2007: 23]

46) ヤズディー師の指導下のコムにはホメイニー師のほか、著名なウラマーとして Ṣ.D. サドル師、シャリーアトマダーリー師、R. ゴルパーイガーニー師が学んだとされる。[Shīrkhānī 1386: 33]

付録2: ハウザのカリキュラム

第一教育課程

科目・時間 (男子)		科目・時間 (女子)		備考
語形論 1	140h	語形論	170h	『平易な語形論 (Ṣarf-e Sāde)』
語形論 2	80h			
統語論 1	40h	統語論 1	230h	『統語論入門 (Naḥv-e Moqaddamātī)』 『導き (Hidāya)』ザマフシャリー (Jār Allāh Abū al-Qāsim Zamakhsharī) による文法書 『サマディーヤ (Ṣamadīya)』バハーイー (Shaykh Bahā al-Dīn 'Āmilī) が彼の従兄弟アブドゥルサマド ('Abd al-Ṣamad) のために著したアラビア語の統語論 [Nasr 1987: 167]
統語論 2	100h			
統語論 3	80h			
法令 (aḥkām)	60h	法令	90h	『法学の訓練 (Āmūzesh-e Feqh)』
信条 ('aqāyid)	40h	信条	45h	男: 『信仰の根源 (Oṣūl-e E'teqādāt)』 女: 『信条の訓練 (Āmūzish-e 'Aqāyed)』
クルアーン朗読法	40h	クルアーン朗読法	50h	『クルアーン読誦法 (Ravān-khānī va tajvīd-e Qor'ān)』
倫理	30h	倫理	30h	

科目・時間 (男子)		科目・時間 (女子)		備考
イスラーム史 1	—	イスラーム史 1	—	研究科目『イスラームの預言者伝の開扉 (farāzihā-ye az zendegī-ye peyāmbar-e Eslām)』
クルアーン 1	—	クルアーン 1	—	研究科目 (クルアーンの記憶と翻訳)
ペルシア語文法 1	40h	—	—	
分析と構文 (tajziyye va tarkīb)	20h	—	—	
—	—	論理学 1	35h	
合計	650h	合計	660h	

### 第二教育課程

科目・時間 (男子)		科目・時間 (女子)		備考
統語論 4	80h	統語論 2	150h	男：『イブン・マーリクの千行詩に対するスューティーの注釈 (Sharḥ al-Suyūṭī ‘alā Alfīya Ibn Mālik)』13世紀のアンダルスの文法学者イブン・マーリク (Ibn Mālik) の書に対する、スューティー (Jamāl al-Dīn al-Suyūṭī) の注釈書 [Nasr 1987: 167]。 女：『千行詩に対するスューティーの注釈』
統語論 5	80h	統語論 3	170h	
統語論 6	80h			『イブン・マーリクの千行詩に対するイブン・アキールの注釈 (Sharḥ Ibn ‘Aqīl ‘alā Alfīya Ibn Mālik)』
論理学 1	30h	論理学 2	170h	女：『ムザッファルの論理学 (Mantiq al-Muẓaffar)』
論理学 2	50h	論理学 3	80h	ムザッファル (Muḥammad Ḥusayn Muẓaffar 1904-64) 著
論理学 3	80h			
信条 2	60h	信条 2	60h	女：『イスラームにおけるシーア派 (shī‘e dar Eslām)』
倫理 2	30h	倫理 2	30h	
イスラーム史 2	—	イスラーム史 2	—	研究科目：『イスラームの預言者伝の開扉』
クルアーン 2	—	クルアーン 2	—	
分析と構文 2	40h	—	—	
法令	40h	—	—	
ペルシア語文法 2	40h	—	—	
合計	610h	合計	660h	

### 第三教育課程

科目・時間 (男子)		科目・時間 (女子)		備考
統語論 7	80h	統語論 4	170h	女：『洗練の豊潤 (Mughnī al-Adīb)』 / イブン・ヒシャーム (Ibn Hishām) の『知性の豊潤 (Mughnī al-Labīb)』の改編版
統語論 8	80h	統語論 5	110h	
統語論 9	80h			分析と構文
分析と構文 3	40h	分析と構文	60h	
信条 3	60h	信条 3	120h	女：『信条の訓練 (Āmuzesh ‘Aqāyed)』1-3巻
信条 4	40h			
倫理 3	30h	倫理 3	30h	
修辞学 1	160h	修辞学 1	170h	女：『修辞学の宝玉 (Jawāhir al-Balāgha)』アフマド・ハーシミー (Aḥmad al-Hāshimī) 著
イスラーム史 3	—	イスラーム史 3	—	研究科目
クルアーン 3	—	クルアーン解釈	—	研究科目
論理学 4	80h	—	—	
合計	650h	合計	660h	

第四教育課程

科目・時間 (男子)		科目・時間 (女子)		備考
法源学 1	90h	法源学 1	170h	男：『源 (Oṣūl)』モタツハリ一著 女：『法源学 (Uṣūl al-Fiqh)』ムザッファル著 + 『要約 (al-M'jaz)』アーヤトラー・ソブハーニー (Āya Allāh Ṣobkhānī) 著
法源学 2	80h			
法学 1	80h	法学 1	170h	『閃光の注釈 (Sharḥ al-Lumu'a)』ディマシュキーの『閃光』に対するシャヒード・サーニー (Zayn al-Dīn Shahīd al-Thānī) の注釈書、「稼ぎ (muta'ajjar)」の章まで
法学 2	80h	法学 2	170h	
法学 3	80h			
修辞学 2	120h	修辞学の道 1	30h	『修辞学の道 (Nahj al-Balāgha)』(アリーの伝記)
信条 5	60h	信条 4	120h	女：『学問の導き (Hidāya al-Ma'ārif)』
イスラーム史 4	—	イスラーム史 4	—	研究科目
クルアーン学	40h	—	—	—
倫理 4	30h	—	—	—
—	—	クルアーン解釈 2	—	研究科目
合計	660h	合計	660h	—

第五教育課程

科目・時間 (男子)		科目・時間 (女子)		備考
法源学 3	80h	法源学 2	170h	『法源学』
法源学 4	80h			
法学 4	80h	法学 3	170h	『閃光の注釈』 男：婚姻まで、女：離婚まで
法学 5	80h			
法学 6	80h			
法学 7	80h	法学 4	170h	女：『学問の導き』
信条 6	60h	信条 5	120h	
イスラーム史 5	—	イスラーム史 5	—	研究科目
クルアーン解釈学	40h	—	—	—
倫理 5	30h	—	—	—
—	—	修辞学の道 2	30h	『修辞学の道』
—	—	クルアーン学	—	—
合計	610h	合計	660h	—

第六教育課程

科目・時間 (男子)		科目・時間 (女子)		備考
法源学 5	80h	法源学 3	170h	『法源学』第二巻終了
法源学 6	80h			
法学 8	100h	法学 5	150h	『閃光の注釈』第二巻終了
法学 9	80h			
法学 10	20h			
法学 11	60h	法学 6	170h	女：『哲学の熟知 (Āshenā'ī bā Falsafe)』モタツハリ一著
法学 12	40h			
哲学	20h	哲学の熟知	20h	女：『哲学の熟知 (Āshenā'ī bā Falsafe)』モタツハリ一著
クルアーン解釈学 2	120h	クルアーン解釈学 3	70h	女：『解釈の精華 (Nukhba al-tafāsīr)』
イスラーム史 6	—	イスラーム史 6	—	研究科目
信条 7	40h	—	—	—
倫理	—	—	—	研究科目
—	—	Āyīn-e Negārash	50h	—
—	—	修辞学の道 3	30h	—
—	—	ハディース学	—	研究科目
—	—	イルファーン	—	研究科目
合計	650h	合計	660h	—

[Širkhānī 1386: 308-17] を基に作成